

五年前に靖国神社に生存隊員が集まり亡き戦友の慰霊祭を行ったとき、大岩実隊長も車椅子で参加され、英霊の神前で、「六百有余の部下を亡くして、我は今この身を生き永らえ皆々様に申し訳がない」と涙ながらに祭文を読み上げられた。

## 南十字星のもとで

### 野戦高射砲第七十二大隊

神奈川県 東海林 俊 文

私の所属していた部隊は、昭和十七年四月、軍令甲第三二二号により編成された高射砲第二十七連隊であり、本隊は札幌月寒であった。しかし、昭和十八年十一月二十八日、動員令を受け、帯広の原隊に帰ってきた。十一カ月ぶりである。行く先は不明であるが軍衣は夏服、帯広の十一月は東京の真冬ぐらいだ。南方戦線のようにだが、しかし嬉しい気分がする。もう覚悟はできているので、いつ死するとも深く醜くからぬことを心

に祈るだけであった。

原隊は懐かしいものだ。札幌から帰って第二大隊第六中隊の兵舎、それも元自分のいた部屋で南方行ききの準備をするとは、考えても見なかった。初年兵のところには何もかも忘れて訓練した演習場は、再び見ることはないであろう、感無量である。

アツツ島で玉砕した兵のうち、この第九十一部隊からは六百人も出ている、今度は自分が出陣をするのだ。家には爪と遺髪を送ったが無事着いただろうか、冷たい風が我が身を包む、一刻も早く南に行きたい、はやる心を静め毎日訓練をする。自分らと時を同じうして北千鳥行きの編成があった。彼らは毛の軍衣服を着け暖かそうであった。

原隊に来て幾日目であろうか、演習に出ると将校集合のラツパになる。このときは雪がチラホラと降っていた、間もなく出発の命令が下りたことを知った。直ちに火砲、付属品その他の梱包に取りかかった、交代で装具も纏めた。昼食もそこそこに出陣式が行われる。国旗掲揚、宮城遥拝、連隊長の訓示、送られる者、送

る者が敬礼を交わし合う、ただ緊張の内に式は終わった。式終了後、火炮、付属品等は帯広駅に運搬、貨車に搭載、駅の作業終了後、再び隊に帰り、完全軍装後いよいよ隊を後にする。声をかぎりに万歳を連呼した。そして「北の空は頼んだぞ」と北方部隊に頼んだ。ただあるものは防人の決心と感激であった。九六式の牽引車と火炮等自動貨車の列は営門を堂々と出て行く。空は暗く夜半を過ぎているだろう隊の付近の民家では密かに我々を見送ってくれる。

帯広出発は十二月一日で、翌朝函館着。部隊は直ちに乗船。救命胴衣の着け方の説明があり、食事をしているうちに船は出帆した。間もなく青森着、夕方まで汽車を待つが大分暖かい。しかし雪が降っている。リングを売る店が出ていたが防諜のためか、地方人との接触を避けるためかリングを買うことを禁止された。我々兵隊は時間をつぶすのに身を持って余していた。

汽車は南へ南へと下って行く、急速に暖かくなつて行く。東北の農家の明るい庭に柿が干してある、北海道では見られぬ。そして自分にとっては何ともいわれ

ぬ懐かしい景色である。山々が巡り田圃が後へ飛んで行く、その中であつて自分はこれからどこかは知らぬい南へ行くのだ、と思ひながら再び見ることができぬ景色を草木一本にすら懐かしみを覚え、別れを惜しむ百姓が腰を伸ばし帽子を取り両手を三度高く上げているのが走り去つて行く。ああ、何と言う感激であるう。元気で田畑を守ってくれと思わずにはいられない。

汽車はこのような風景を次から次へと繰り返して東京に近づく。しかし、東京は夜中に通過予定とのこと、雪が消えて赤い干柿に変わり、そしてだんだん緑を帯びて東京は近くなり、近くなるにつれて眠くなつてくる。旅は長いので毛布を椅子の下に敷いて横になる。スチームが身を焦がすように熱い。しかるに眠さはいつの間にか総べてを忘れさせてしまう。それでも東京が近くなるにつれて気になるのか時々目が覚める。汽車の音が身に伝わり、その音がきざまれるにつれて南が近くなる。音は生命の尺度のごとく、いつまでもいつまでも続く。幾百の生命はこの音と共に南へと南へと進む。

汽車は赤羽から池袋を経て山手線を新宿へと向かう。新宿が近くなる。汽車の窓から何物かを得ようと懸命に窓外を見る。ここから家には三十分。家の者は何も知らずに眠っていることだろう。ほんやりと街路灯が道の一角を照らしている所が目に入る。どこも通い慣れた道である。そのわずかに見える所が懐かしい。一瞬にしてその感激は暗い鉄道の中に吸い込まれてしまった。この感激がまだ消えぬうちに明治神宮を通過、神宮、宮城、靖国神社を遙拝する。品川駅の停車は十分もせずであった。このわずかな時間に「射撃板」を受領して汽車に乗せる作業である。

朝、熱海付近の海岸を通過する。緑の葉、海岸の岩、蜜柑島、それに右手の富士山、北国の景色と比較する。緑を心ゆくまで胸の奥に刻みつけた。朝日を受けて踏切に立っている小学生が両手を挙げて見送ってくれる姿が、焼き付けられ目に残る。自分の心は平靜を装っているが心苦しい。汽車の窓から万歳を連呼したいような気持ちであった。

名古屋では国防婦人会の人々が駅頭でお茶を接待し

ていた。満州帰りの部隊とも擦れ違う。大阪、神戸と過ぎて行く、その間に予防注射や命令、会報などがあったが車内は平凡そのものであった。

この土地では多忙な日を送った、弾薬を海田市（カイタイチ）に受領に行く者、船内作業、埠頭作業など、自分は船内作業を行う。岸壁には「決死で来た荷だ、必至で降ろせ」の標語が見える。作業に行く船は九千トンばかりの貨物船「能登丸」、これが我々の船である。大きいものである。クレーンは皆電気で動く。ハシケより上げられる弾薬、糧秣、貨物、兵器は船倉に入れられる。幾ら入れてもなかなかいっぱいにならぬ。焦げ茶に塗られた船倉の中は、これらの荷を捌く兵隊の掛け声、あるいは号令、弾薬箱を置く音などが反響している。初めての船倉作業は自分にとってはきついものであった。皆もそうらしい、寸刻たりとも休む暇がない。それに空気の流通が悪い。しかしそれでも事無く作業は進んで行く。一生懸命にやっているうちに要領を得てくる。食糧を積んだ上に火炮、車両と並べる。このようにして船内作業を終わりに出発を待った。

早朝、千田小学校に集合する、まだ空は暗い。それでも兵隊は多数集まっている。部隊の集合が終わると、直ちに埠頭に行く、凱旋館の前に整列し、あとは乗船を待つばかりである。再び日本の土は踏まぬことであろうと思つても、さほど感ずる所もなく、静かに自分の船が来るまで待つ、完全軍装の兵隊は上陸用舟艇に入るだけ乗せる。エンジンの音も軽く波を蹴つて沖にある船に向けて棧橋を離れる。思い合わせたように兵隊は帽子を振る。陸がだんだん遠くなる。帽子を振つても答える者はない。見送りの人はいないが、日本の国に別れを告げているのである。さすがに兵隊は何も言わずに陸の方を見ている。

宇品出港は十二月十八日。波が後へ後へとうねって行く。我々の船「能登丸」は目の前にある。作業の終わった船は静かである。ただ船腹より流れ出る水の音が静けさを破る。大発は横付けになる。波のうねりが大きいため、タラップに上がるのに注意しないと危ない。背中の背囊が重く肩に食い込む。事無く船上の人となる。船員が我々を見ている。自分たちの入る所は

船倉の上部を人が入れられるように、木の棚を作り寝台としている。腰を曲げて入らないと頭がつかえる。窓がないので通風筒が付けてありモーターが風を送つてくれる。

位置の選定、場所の整理をしているうちに船は出ている。それまで何時に出帆するか知らなかった。甲板に上がると上陸用舟艇が沖に向かって多数行く。救命胴衣を着けている。演習に向かうらしい。自分たちもこの救命胴衣を与えられた。これが最後の本州の土地だ。

船は一路南へ南へ。暖かさが増してきて、波の色は黒い、黒潮というのはこのためだろうか。どこを見ても水、水の連続。飛魚が白い線を引いている。船団八隻は、皆ゆるく船体を動かしているが、各船は空と海を敵襲に備え警戒を続けている。

船に弱い者はそろそろ参つてきたらしいが、自分も船旅の経験がなかったが、暗い船倉の隅で支給されたビール一本全部を飲んでしまい、船に自信を持つことができた。日本のビールはこれが最後であった。

夜になる、どの船も灯を消している。ただ波の音とエンジンの音がかすかに響く、波頭が白く見え、夜光虫が青く光るだけだ。澎湖島と台湾の間を航行していることが分かっただけで、あとは命令や会報で、北緯何度、東経何度というが、どこにいるのか見当がつかぬ。そのうち高雄に入港する。内地の面影はさらさらないが、日本の町を再び見ることはないだろうと思っただ。

マニラ入港は十二月十八日だったが、途中機関砲の試射を行ったりして、上陸は十二月三十日だった。マニラは空襲警報下であるが、こうこうと電灯がついている。我々は通過部隊ということで戦闘任務はなく、マニラの守備隊にすべてお任せするほかはない。

サンチャゴ城外で火砲の整備手入れ中、何となく体がだるい。それでもその日は一日中多忙で一生懸命やる。北海道勤務から南方へ来た私も Deng 熱にやられたらしい。体温を計ると三九度幾らかある。熱の高い割に苦しくないが、関節が痛く、食事は苦しくて美味しくない、また小用が近い。元気なうちはよかったが、

食物が食べられぬので目が回る、そうになると小用も一仕事で、二階から下まで降りるだけでうんざりする。

Deng 熱は南方に来た者はだれでもかかるといって、ちょうど一週間熱が出っぱなしであった。最後の一週間は夕方四〇度もあったが、次の朝は平熱になりこれで治ったのである。ちょうど、この時に出發命令が出てアンボンに向かうことになり、マニラ港出帆は昭和十九年一月二十日であった。

我が隊の船は「健和丸」という。中隊の火砲一門を甲板の上に設置、自分は伝令の任を命ぜられ、命令受領、伝達など任務は重大である。

石炭の補給を終わって船は南へ南へと下る。赤道直下のハルマヘラ島が近くなる。ワシレの湾頭はよく敵の潜水艦が隠れているとのことである。警戒は厳重である。予想通り敵潜水艦が待っていた。直ちに戦闘姿勢に入る。発見時は潜望鏡が認められたとのこと、中隊の火砲は直ちに攻撃したが水中のこととて戦果は確認できなかつた。護衛の飛行機からも爆弾を投下したが手応えがない。駆潜艦が爆雷を投下しているが、見

失ってしまったらしい。無事にワシレ港に入港したが残念でならぬ。ワシレ港と言つても名ばかりの港で埠頭も何もない、説明されて初めて気が付いたが、砲台が盛んに造られている。マラリヤの原生地なので船は余り陸に近寄らぬ。

マンガローブの木が一面に海岸を包み、夕方になると太陽はまばゆく輝き、海に反射し、そしてそのマンガローブの木を黒く海の上に浮き出させている。下帯一本の兵隊が伝馬船に筏を引かせてその上に乗っている。陣地構築の材料であろう。赤道直下の暑さ、灼熱とはこのことであろう、兵隊は現地人のごとく黒く自分らの船の下を通るときに「内地から来たのか、国はどこだ」と怒鳴っている。「部隊は何だ」と懐かしげに聞く。こちらでも大声にそれに応える。一週間ばかりここにおいて、上陸したのは一部の者だけだった。

一週間は過ぎた。いよいよアンボイナ諸島のアンボンに向かうことになった。これより先はどこへ行くのかまだ分からない。まだ潜水艦が待ち伏せているもの様子である。友軍機が上空で護衛に就いているので

心強い。零式攻撃機が一度我々の船の横に着水したが直ぐまた離水して行った、三人乗っていた。

ワシレ湾を出るとわが隊の乗っている船と左の船の間に敵潜水艦が我々の船を待っていた。この時は伝令の任務を解かれて甲板にいた。海軍機が三、四回急降下した。「この下に敵在り」の信号である。最後に爆弾を投下した。皆部署に就く、駆潜艇が爆弾の投下された所に急行、爆雷を盛んに投下、その間我々の乗っている船は目的地に向かう。駆潜艇は遙か後方になる。爆雷の音と響きがズシンズシンと自分らの船にも感ぜられる。

暗い船倉の中で聞いた戦果は「敵潜水艦は我が軍の攻撃に依り撃破せるもの如し」であった。船の中より甲板に出ると強い太陽はすべての物を白く見せるくらいに強い。船は何事もなかったごとく白い尾を引いて進む。

アンボンは近くなる、舷側に当たる波は白い泡を残しピチピチとサイダーの泡が消えるときのような音を立てる。水中の泡は白くあるいは銀色に見える。飛魚

が舷に当たり驚いて左右に飛び退く、美しく輝いて水中に潜ってしまう。敵潜水艦に遭遇しても直接敵を見ることがないので戦ったような感じがしない。しかしながら不気味で気持ちが悪い。やられない限り狭い船内生活に変化を与えてよいだろうなどとのんきなことを考えている。兵隊はお茶で禪を洗濯したり体を拭いたり、海や雲を眺めたり、海風に当たり涼を求めたり、窮屈な船内生活を耐え忍んでいる。

船倉の暑さと人息れは口で言い表わすことはできない。アンボンに近くなるにつれて再び潜水艦出没の可能性が大きくなる。幸いなことに何事もなくアンボンに入港する。島の小さい割に立派な埠頭があり、船は岸壁に横付けになる。部隊はこの島の任に当たるものようであるが、まだ命令は出ていない。

積み下ろし作業はどこでも相変わらず忙しい。この島は毎日のように敵の爆撃があるので特に忙しい。埠頭の半分ほどは五百キロほどの爆弾でやられている。そのために戦地に来たという感じが強く、勢い作業も気合が入ってくる。この兵隊は非常に活気がありセ

メントだらけの埠頭の中を大声を出して何かしら怒鳴ったり、駆けたりしている。夜になると船は沖に出てしまうので埠頭作業班の自分は埠頭岸壁の上で寝た。

何といっても夜はさすがに寒く感じる。汗だらけの襦袢一枚ではどうにも致し方ない。固いコンクリートの上に横になって、南の星の美しさを心ゆくまで味わいたいと思っても寒くてかなわない。おまけに海風がやけに身にしみる。それでもいつの間にか眠る。これで作業も終わったと思うと気が楽である。命令のあるまですぐに上陸できない。陸に上がって作業した兵隊たちは寝る所がない。その他の兵隊たちはしばらく船の上で陸を眺めて暮らす。

自分は船より上がる。塩からい飯のために水を飲みすぎ、その上埠頭の岸壁で寝たために腹を少し痛めた。しかし作業を休むほどのことはない。それでもクレオソートを二、三粒飲んだ。その時のことである、第一回目の空襲があった。未だ火砲を整列する場所もなく、上陸の命令が出ないので、兵隊たちは船の上にいる。そのために戦闘は行われなかった。この島に以前から

いる部隊は戦鬪を交えた模様である。上陸していた自分らは海岸にある防空壕の中に入れられた。これが戦地で経験した最初で最後の防空壕の体験である。

壕の中は余り沢山の兵隊を入れたために苦しい。自分分は少し腹を痛めているので、気持ちが悪くなった。

外に出してもらおう。見ると敵機は青と赤の灯をつけて我々の上空を飛び回っている。敵は照明灯を五、六個ほど落とした。この時に我が飛行場のガソリンタンクがやられた、そして第一回目の敵襲は終わる。

第二回目の敵襲のときは、我が隊はジャワに向かうことになり、「山吹丸」に火砲、弾薬等を積み込み、その船内にて待機する。空襲中は船は沖に出て動くことはない。一昨日の空襲のときのように二・三機ずつ明かりをつけて一夜中飛び回る。爆音が遠いときは安心をしているが、近くなると余り良い気持ちがない。いよいよ近くなる、我が隊のいる船に伝馬船が近づき、その船よりノロシが上がる。すかさずその船に弾を浴びせた。エンジンの音は止まり静かになる。先方より弾を見舞われるかもしれぬという気持ちがあつたが、

そんなことは気にせず、将校と兵二、三人がその船に行つたが人は一人もいない。丸木船が一つ漂っている。どのようにして逃げたのか暗くて見当らぬ。アンボン人は南方の土民で日本人に対する感情が一番悪いとのこと。そのため空襲のある度にノロシが上がる、そして必ず幾人かは捉える。中国人も混じっている。

山の中腹がポーツと明るくなる。何かやられたらしい。だんだんと明るくなる。ただの明かりではない。ポンポンと音が聞こえ、次第に大きくなる。東京両国の花火より大きい。弾薬がやられたのだ。「こん畜生やりやがったな」とだれかが怒鳴る。何と残念なことであろう、他の兵も同じ気持ちで見ていることであろう。敵機はもう遠退いている。またいつ来るかもしれない。その破片はこの船まで飛んで来るようになる。甲板にガラガラと突き当たる。遠いので穴のあく心配はないらしいが、危険で甲板に出られぬ。数十分にして音は静かになる。陸地と連絡をとる。我が隊と共に来た佐藤隊の弾薬一万発ばかりが全部やられてしまった。そうだ。はるばる内地から苦勞して運んで来た弾は、

一夜にして無になる。戦闘も交えずして無になる。自分らも残念であるが、佐藤隊はなお残念であろう。同じ高射砲中隊であるので同情の念一入である。

船は翌日、日没とともに出航の命令が下る。一度沈んだ英船をサルベージが引き揚げ修理したものだという。明治時代の貨物船だ。速力は八ノット平均である。アンボンからジャワまでの海は俗にいう鏡のような海である、相変わらず飛魚は船をよけるようにして飛び去る。右を見ても左を見ても海ばかり、対空並びに対潜監視は相変わらず嚴重である。夜は汽笛が盛んに鳴る。どういうものかこの船は、よく海の真ん中で汽笛を盛んに鳴らす。夜など気持ちのよいものではない。対潜監視は「右何度、灯火一つ」などと言うと敵潜水艦の浮上？かと思う、しかし何事も無い。眼鏡を通して見ると、セレベス辺りの土人が火を焚いているのだらう。十二日余りの航海も無事で平凡であり、静かな海にゴトンゴトンと単調なエンジン音を響かせ白い波の道を引きながら往く。今度の航海はよく雨の降る航海であつた。昼ごろになると必ずスコールがやって

きた。明け方に降ることもあつた。水の不足がちな船上ではこの上も無い慈雨である。体を洗つたり、襦袢を洗つたり、毛布や褌まで洗う。しかし南方とは言えスコールの水浴は寒い、ガタガタと震えていた。

我が隊は火砲を連ねて敵襲に備えた。そのため天幕を張りその中で勤務し、寝起きしている。お陰様で雨のために全身や装具まですぶ濡れである。天幕が古いので何とも致し方ない。

右にマヅラ島を見、スラバヤが近くなる。この辺りまで来ると海が浅くなるので、船の通つた後は黄色くなる。逃げ遅れ赤く錆びた敵船がマストだけ出して山沈んでいる。機雷があるので浮標が唯一の道標である。現地の船が白い三角帆を架けて擦れ違い、また追いつ越される。見るもの全部珍しい。船内に入っている者が甲板に出てきた。我が分隊の火砲は下船の準備を開始した。撤去時は敵の襲撃のことを考えると余り良い気持ちがない。港の中なので友軍部隊が我が隊の船を守ってくれる。

二月十七日、上陸が開始された。先ず兵隊の装具を

先に降ろす、宿舎の清掃を行う者は直ちにウオノクロモに出発する。自分は残つて弾薬、兵器、糧秣、貨物などを積み下ろしする。坂本軍曹は兵二人ばかりと共にバナナを買い出しに行く。

全員で兵舎のゴミを掃き捨てる。オランダの兵舎だつたらしく一人一人区切りの跡がある。何とか入れるようになった。後から来る兵隊も来たらしい。分隊の割り当ても決まり、今夜ジャワで初めての夜を明かすことになる。

管内は広く各部隊が入っているが、我が部隊が一番大きいようだ。ところが他中隊にA型パラチフスが発生した。間もなく中隊長が南方第七陸軍病院に入院した。兵たちは嫌な予感に囚われる。中隊の内半数は三角隔離といつて別の兵舎に移されてしまった。幾日かして血液検査があり、自分もA型パラチフス菌が見付かったため第七陸軍病院に入院することになる。このときの入院患者数は中隊の三分の一の五十名で戦力に影響する。

自分では痛くもないので残念で仕方ない。入院生活

中、目を閉じて遠い日本のことを思うと、一日も早く退院しなければ国民に申し訳ないという気持ちになる。このような時に空襲も度々ある。患者は白衣を着ているので毛布を被り白をかくさなければならぬ。壕に入つたが敵機が爆弾を投下しないと外に出る。重症者は病舎に入っている。爆音は不気味な音を立てて一晩中飛び回っていて、時々爆弾を投下する。相変わらずここでもノロシが上がる。病院上に飛来したときも塹の外でノロシが上がり余り気持ちは良くない。元気だつたら犯人を捕らえてやるのだが残念である。

監視兵は「何時方向爆音、爆音遠くなる」「何時方向爆弾投下」などと報告している。この程度の空襲なら大したこともなさそうだが、防空壕上の衛生兵は「具合の悪い者は言つてこいよ」と心配している。明け方四時ころには敵機は去る。自分たちはベットに帰る。看護婦は「疲れたでしょう、熱の出た方はいませんか」と聞いている。前線に出て死ぬであろう兵隊の耳には、あたかも母親の愛情のごとき優しい言葉は、アクセントまで耳の底に残っている。

退院の日は我々のために赤飯を炊いてくれ、入院中は食べたこともないお菓子やサイダーが出た。看護婦は心配して「沢山食べてお腹を壊さないでくださいよ」と、最後の彼女たちの心遣いを嬉しく思った。中隊からは対馬一等兵が自動車で迎えに来た。有り難いことだ。

退院後は毎日が訓練であり、本部の一部はスンバ島に渡っていったが、我が中隊と第三中隊のうち二個分隊だけが残っている。陣地は一時的なもので土を盛り上げて作った。これと直角に偽陣地を左右に作り、その中に木製の偽高射砲を入れて置いてある。

一日のうち、三、四時間は中隊訓練を行った。その他は分隊教練、陣地補修、学科などであるが、まさに実戦を加味した厳しいものであった。私は六番砲手を命ぜられたが、火砲は常に右、若しくは左に回転する六番は火砲の中で一番動作や操作が困難であり、また大切な所だったので苦心をした。他の兵隊が休んでいるときも操作を練習し他の六番砲手に負けたくなかった。中隊には、この六番砲手は六名しかいない。しか

し、この苦勞が後に随分と役にたったし、苦しい中にも外出許可というまたとない楽しみもあった。

中隊長は弾薬のことは非常にやかましかった。また、兵隊も弾薬については常に意を用い、弾薬庫の温度は何度かということは皆知っているくらい気を配っていた。雨でも降ればだれ言うことなく弾薬庫に行つて異常の有無を見る。これは南方の各地にいる間、常に行つていたことである。南方の雨は前触れもなく来るので大声で「雨が降るぞ！」と怒鳴る。すると兵隊は自分の陣地に飛んで行き、弾薬、火薬等を雨から守るため覆いをしたり、水が流れ込まぬように暫く陣地の中で様子を見るのであった。そのため弾薬庫の入口に道具を入れる所を作つたし、火砲は朝夕手入れ、点検を行った。水準を正確に保つのは容易のようであるが、技術が必要であり、これに当たるのは古い兵隊であった。

見えない目標の射撃には連動射撃装置がしてあった。即ち一〇センチの対空双眼鏡と火砲とを連動に連結し、

方向、射角を火炮に与える装置である。この点検を朝夕行い、送話器から火炮の受話器に送られる感度を常に最良に保たれるよう苦心したものであった。

## 野戦兵器廠

### 南方各地転戦

千葉県 鎌田 孝

#### 〔軍 歴〕

昭和十八年二月一日、工兵第三十二連隊要員として、東京赤羽近衛工兵連隊補充隊（東部第十四部隊）に入営。九日、屯営出發。十日、下関出發。十一日、釜山上陸。十二日、鮮満国境（安東）通過。十五日、山海関通過。同日、大東亜戦役支那方面勤務開始。十六日、済寧着。同日第二中隊編入。

六月二十九日、第一期教育終了。

七月十日、昭和十八年度第一次兵科幹部候補生を命

ず。

九月十日、上等兵の階級に進む。

十月十日、甲種幹部候補生を命ず。

十一月十日、伍長の階級に進む。

自六月三十日至十一月三十一日、済寧付近の警備勤務に従事。

昭和十九年一月六日、教育修習のため陸軍工兵学校に分遣を命ず。

一月七日、済寧出發。十日、鮮満国境（安東）通過。

二十日、松戸陸軍工兵学校入校。

二月一日、軍曹の階級に進む。

八月十日、同校卒業、同日曹長の階級に進み見習士官を命ず。同日、将校勤務を命ず。同日、柏近衛

工兵第二連隊（東部第十四部隊）に配属。同日、第二中隊付を命ず。召集兵の教育を命ず。

十月八日、工兵第三十二連隊（原隊、北支より豪北ハルマヘラ島に転進）の楓第四二五八部隊に復帰を命ず。同日、屯営出發。九日、広島着、近衛師

團關係各兵科見習士官引率。二十二日、「牡鹿山